中国文学研究わが異端遍歴

池上貞子

台湾と中国

東外大の学生だった時、台湾へ行った。はじめての海外旅行だったが、本来なら中国大陸が先になるはずだった。しかし、当時、中華人民共和国は「中共」と呼ばれ、日本とは国交のない国であったので、一般の人が個人で気軽に行くことはできなかった。それで一九六〇年代半ば、早稲田大学の学生を中心に学生訪中団ができ、中国に関心をもつ学生の中国旅行が行なわれ始めていた。大陸までの直行便はないので、まず香港に行き、それから鉄道で羅湖という国境の町に行く。そして橋を渡って対岸の中国側入り口深圳に入り、それから鉄道や飛行機で中国国内の目的地に行くという旅程であった。期間は三週間、費用も一五万円かかり、大卒の初任給が一万五千円くらいだったかと記憶するが、いずれにせよ当時としてはかなりの大金だった。何しろ、国立大学の学費が月一千円、幼稚園より安いと言われた時代である。

わたしはその訪中団に参加して大陸へ行くつもりであったが、その一五万円を自分で作ることはできず、母に助けてもらおうとした。ところがそこに親戚筋から横やりが入り、「中共」などに行けば、公務員などをしている親族に迷惑がかかるから辞めよという圧力がかかった。今から言えばウソのような話だが、要するにそんな時代だった。圧力はともかく、それによって母の兵糧責めにあい、結局、中国行きを断念せざるを得なかった。そのかわりに、その間自分で貯めたお金で、高校時代の友人と北海道一周旅行をしようということになった。その相談をして

いるうち、船を使えば台湾へ行った方が安いということに気がついた。友人の父親も同行すると言う。

というわけで、一九六七年の夏、わたしは三週間をかけて、当時まだアメリカ占領下にあった沖縄を経由して、台湾に行った。ほとんど観光旅行に終始し、当時の台湾のことを何も理解していなかったのだが、その時知り合った少し年下の台湾人の女性とは、今でも親しく交際している。しかし、一番印象的であったのは、本省人／外省人の二項対立だった。それまで何の知識ももたなかったので、なおさら衝撃的であった。そのことを中嶋嶺雄先生の歴史関係の授業のレポートに書いたら、ゼミ生ではないのにゼミの雑誌に掲載してくださった。これはわたしにとってはじめて印刷公表された文章だったが、本名で発表する勇気はなく、ペンネームを使った。

実は、当時、中国関係のことを学んでいる学生にとっては、台湾行きはとてもビミョーな問題であった。大陸とは国交がなく、日本政府は中華民国＝台湾を「中国」の代表として国交を結んでいた。経済的社会的な交流は台湾の方が盛んであったが（買春ツアーなどという言葉が問題になったのは、それからしばらくしてであった）、学問分野の研究対象としてはあくまで中国＝中華人民共和国が正統であったので、台湾との関連はすぐにも政治的立場と結びつけられる可能性があった。そのため、中国（語も含む）研究のため留学したい人は、当面あきらめるか、香港を代理と考えた例も少なくなかった。

ともかくそんなこんなで、わたしはかなり長い間自分が台湾に行ったことに沈黙を守った。おおっぴらに口にできたのは、一九八〇年代の終わり頃からではなかったかと思う。その時までに中国では、プロレタリア文化大革命（一九六六―七六）を経て、改革開放政策がとられはじめ、民主化運動を経てやがて一九八九年の天安門事件（いわゆる六四事件）に至っていた。台湾では、国民党政権が台湾に移って間もなくの、一九五〇年に発布されていた戒厳令が一九八七年に解除され、「台湾意識」がキーワードになっていた。やがて、国民党から民進党への政権交代があり、現在また揺れ戻しが起こっているのは、後の話だ。

少数民族研究のこと

話を一九六〇年代に戻すと、現代中国文学は一九四九年の中華人民共和国成立後一貫して、一九四〇年代前半に延安の革命

根拠地において発表された毛沢東「文芸講話」の意を汲んだ、「人民文学」が正統とされてきていた。そして一九六六年夏よりプロレタリア文化大革命が始まると、文学・芸術は典型化され、硬直化がすすんだ。極度に政治化された階級観点による勧善懲悪の世界だった。そしてこの頃、日本（のみならず世界中）では学生運動が盛んになり、三年半あまりのわたしの大学生生活は根底から揺さぶりをかけられた。ロックアウトした期間の関係で、わたしの大学卒業は一九六九年六月末となり、このことは就職の際など生涯付いて回っている。ロックアウト期間分の補講は、機動隊導入で混乱したままのキャンパスを避けて、学外で行なわれた。卒論の指導教官だった田中清一郎先生のゼミは小田急線の経堂にあった先生の自宅で行なわれ、昼時には夫人手造りのサンドイッチをごちそうになったりした。

こうした六〇年代から七〇年代にかけての、昂揚と虚無の雰囲気の中で、たとえば魯迅について、作品は好きであったが、文化大革命の過程で正統の位置を超え、政治的にもオールマイティのような存在にもっていかれている状況に、わたしは何となく違和感を覚えた。卒業論文は田中先生の下で魯迅や五四期の文学運動のことをまとめたが、東京都立大学大学院では村松一弥先生の周辺で組織されていた中国民間文学研究会（のちに改め中国民話の会）に参加して、中国少数民族の口承文芸について研究した。修士論文は「ホジェン族の民話とその周辺」として、中国最小の民族の叙事詩について考察した。ホジェン族は中国とロシア（ソ連）国境のアムール河（黒竜江）沿いに暮らす民族で、日本では黒澤明監督の映画「デルス・ウザーラ」（原作はウラジミール・アルセニエフ著の同題書で、平凡社東洋文庫に収められている）で知られているゴリド族のことだ。数年前、北海道二風谷のアイヌ資料館を訪れたところ、資料館の二階はかなりの部分ホジェン族関連の展示で占められていたので、懐かしさとともにある種の感慨をおぼえた。

そもそも、なぜわたしはこのホジェン族を選んだのか。一つには、わたしが都立大大学院に入った当時、中国民間文学研究会では中国少数民族の民話について翻訳出版の話があり、会員の間ですでにだいたいの分担が決まっていた。もちろんほとんどの先輩が自分の研究対象としている民族を選んでいた。一番手薄だったのは、村松先生が「森にけものを追う人々」とカテゴライズしたツングース系の人々や「草原遊牧民の子孫たち」と呼んだモンゴル系の人々（村松一弥『中国の少数民族』毎日

新聞社、一九七三)」のグループだったので、それらの担当になった。そして、修士論文を書く段になって、それらのなかでホジェン族を選んだ。それは彼らが中国の五〇余の少数民族のなかで、もっとも人口が少ないことがわかったからだった。当時の資料では六百人くらいということであったが、実はその後、アムール河対岸のソ連側には数万人いることを知り、「少数民族」の概念を考えさせられる契機ともなった。いずれにせよ、その時の心持ちとしては、最も弱小とされている民族がどのような文化をもっているのか、知りたかったのである。

主たる参考文献として、凌純声という人の『松花江下游的赫哲族』と鳥居龍蔵の沿海州の調査記録の世話になったように記憶している。結果的に見ると、ホジェン族には「イマカン」と呼ばれる英雄叙事詩があり、それは樺太アイヌの叙事詩を仲介にすれば、北海道アイヌのカムイ・ユーカラと結びつくようなものであった。それはさらに、もしかして大林太良氏などのユーラシア大陸全体を見渡す叙事詩の研究と結びつけていけば、「ベオウルフ」や「ニュールンベルグ」など、ヨーロッパのそれとも比較研究が行えるのではないかと考えないでもなかったが、生来の怠け心でそのための方法論を身につけようと言う地道な努力もしなかった。修士論文提出後は何となく、もともと関心をもっていた個人作家による創作の世界、現代中国文学の世界に戻ってしまった。ある意味では「正統」に戻ったと言えるのかも知れない。ただし、来年度、跡見で新しく受け持つ授業では、東アジアという地域を考えるために、この中国の少数民族のことをとりあげようと考えている。三〇年以上も経って元に戻ることになるとは、まったく人生で無駄なことは何もないと感嘆せざるをえない。

実は、都立大大学院時代は、大学そのものよりは、代々木にあった竹内好主宰「中国の会」の事務所に出入りしていたことの方が多かった。そこには雑誌『中国』(発行は徳間書店)の編集部があり、若い人も自由に出入りして資料を見たり、居合わせた先達と言葉を交わすことができた。事務所には竹内先生はもちろん、鶴見和子、市井三郎、橋川文三という、当時の知識人代表のような人たちが定期的に姿を見せていた。今にして思えば、この校外校でもっと貪欲になればよかったのだが、後の祭り。安易に考えていた翻訳についても、竹内先生に胃が痛くなるまで絞られたエピソードなど思い出は尽きないが、今回は時間と紙面の余裕がないので、いずれ別の機会にちゃんと

振り返ってみたい。

張愛玲研究のこと

修士を終えたあと、その先に進む気も起こらず、外国人技術研修生向けの日本語教師のアルバイトなどをしながら、民間文学研究会の活動を続けた。その頃、わたしを含め、会員には出産・育児の真っ只中の人が多かった。仕事・家庭・研究などの問題を抱え、悩む人が多くなったとき、指導教官の村松一弥先生がそれをも包括するような研究態度のあり方や女性としての生き方などを示唆され、会の名前も「中国民話の会」と改めた。何でも業績第一に考える今日からみれば、このネーミングの変更は逆行だったのかも知れないが、このことで救われた会員も多かったはずだ。この民間文学研究のなかで、山東省から中国東北地方の吉林に広がるチョウセンニンジンにまつわる「人参故事」について調べているうち、その種の民間説話をうまく作品に取り入れている駱賓基という作家に行き当たった。彼は日本では、一九五〇年代の社会主義中国憧憬のなかで作品を翻訳紹介された同時代中国の作家のひとりで、岩波新書の『北望園の春』で知られていた。

そんな時、中国では文化大革命の傷跡を克服しようとする文学が発表されるようになり、わたしも従維熙という作家に関心をもった。彼は多くの知識人が批判された一九五七年の「反右派運動」のとき失脚した作家、いわゆる「右派」作家のひとりで、二〇余年にわたって体験した労働改造場（収容所）を舞台とする作品などを書いていた。その頃まだ少なかった中国からの帰国者の友人に勧められ、思い切って出版社あてに手紙を出し、それをきっかけに本人や周辺の作家たちとも交流がはじまった。

一方、一九七七年春から法政大学に非常勤講師として出講するようになり、同大学教授だった尾坂徳司先生とお話する機会が多くなった。先生は一〇代の頃から中国に留学され、日本占領下の北京大学を卒業後、上海にあった東亜同文書院で教鞭をとられていた方だ。戦後、帰国されると、法政大学や愛知大学で中国語および中国文学の教育に携わるとともに、現代中国文学史や個々の作家の評伝、作品の翻訳など、現代中国文学の紹介に尽力されていた。戦後生まれのわたしにとっては、先生の体験をうかがうことはこのうえない喜びで、やがて小さなグル

ープを作って定期的に先生のお話を聞く機会をもったりした。

一九七九年にはじめて中国を訪問して、自らの内面が総ざらいされるような感覚を体験した。そのことを詩にして、第一詩集『黄の攪乱』に収めた。そして、一九八一年夏から二年間、中国天津にある南開大学でお雇い外国人教師として日本語を教えた。この間、駱賓基や尾坂徳司先生の紹介で、さまざまの文学者に会った。駱氏から紹介されたのは、日中戦争の間、「解放区」（延安の共産党支配区）・「国統区」あるいは「後方」（国民党支配区）・「淪陥区」（日本軍支配区）と分かれていたうちの「国統区」に、尾坂先生の紹介は「淪陥区」にいた人が多かった。これはおふたりがその時代にその地域に暮らしていたということで、このことを話題にしただけでも一編の文章になってしまう。もちろん従維熙氏の紹介による文学者との交流の範囲も拡大していった。

二年間の滞在を終えて帰国した後は、尾坂先生の話も、自らの中国体験と重ね合わせながら、奥行きをもって聴けるようになった。そうした先生の話のなかで、これまで研究されなかったが、扱ったほうがいい作家のひとりとして張愛玲の名前が出た。先生ご自身は、そのブルジョア趣味（お嬢様的感覚）が気に食わないので好きではないが、日本占領下の上海で非常にもてはやされ、愛読者も多かったという。先生の蔵書を貸していただいたりして作品集を読んでみると、男女を中心とした人間関係のもつれをテーマとする作品が多く、その心理描写や文学的技法は、これまでに五四文学運動の伝統をもつ近現代中国文学としてとらえていたものとは相当異質の、新しい世界であった。まずは勧善懲悪がなく、人間観察は冷徹。むしろ露悪的とさえ感じられる。とにかく近代以降、「これまでの中国文学にこんな世界もあったのか」というのが正直な感想であった。

それから張愛玲について調べはじめたが、これが前の少数民族のホジェン族のところで経験したのと同じように、実は彼女は香港や台湾など、大陸以外の中国語文化圏ではもっとも愛読されている作家なのであった。彼女は今でこそ中華人民共和国においても魯迅と並ぶ地位を与えられ、研究書は毎年数え切れない程出版されているが、実は長い間異端の地位にあった作家だった。戦前の上海、とくに日本軍による占領期（一九三七―四五）に一世を風靡したため、「人民文学」を正統とする現代中国文学史の中では異端視どころか無視、まったく存在さえも話題にされなかった。少なくとも、わたしが現代中国文学と関

わりを持ち始めた一九六〇年代半ばはそのような状況で、それは経済の改革開放政策が文化などに及びはじめた一九八〇年代前半まで続いていたのだった。

一方、「中共」の外の香港や台湾などの中国語文化圏では、状況はむしろ反対だった。五〇年代半ばにアメリカに移住する前、本人が三、四年の間暮らしていたこともあって、香港では一貫して読まれていたし、台湾では五〇年代末から「反共」とからめた複雑な要因も絡んで、現代中国文学を代表する作家として圧倒的な読者層をもっていたのだ。彼女の作品を読んで育った世代の作家たちが活躍している現在、大陸を含めたこれらの中国語文化圏では、彼女は「祖師奶奶」（女性始祖）という称号さえ与えられている。ちなみに二〇〇八年三月現在、東京で公開されている映画「ラスト・コーション（色、戒）」の原作は張愛玲で、台湾出身の監督アン・リー（李安）は彼女の文学の信奉者である。

中国語文学のこと

また先を急いでしまった。話を八〇年代に戻すと、わたしは異端の張愛玲について研究をはじめたわけだが、資料はもちろん先のような事情で台湾や香港のものが多かった。わたしの出発点は中国大陸にあったので、最初はまさに暗闇を手探りで歩くようなものだった。しかし、時代は変りつつあった。改革開放政策で規制緩和が行なわれ、それまで封印されていた様々な文化の流入があった。張愛玲の場合、逆輸入と言った方がいいかも知れない。いずれにせよ、そんな中で、魯迅の弟で、親日的であったとして戦後否定され続けていた周作人、実質上亡命した張愛玲、そして台湾を基盤に活躍している在米作家の白先勇などの作品が紹介され、読まれ、研究されるようになったのである。

この潮流のなかで、経済発展による都市化、それに伴う疎外感をもちはじめた上海の人びとにとって、かつて「モダン都市上海」の語り部であった張愛玲は、世紀末になっても充分自分たちの心理の代弁者であった。こうして張愛玲が中華人民共和国で受け入れられていく過程で、当然、彼女の位置づけ、アイデンティティの問題が出てきた。今日では、魯迅を男性の視点で旧弊な中国の問題点を暴いた先駆者とするなら、張愛玲はその女性版であるという見方も出ている。先ほどの「祖師奶奶」

は、そうした考えの最先端にあると言える。

ただし、こうした文学上の肯定的な評価は、たとえば政治面では盤石とは言えない。ここ一〇年あまりの間に、本人が後半生を送ったアメリカ、本人の人生にも深い影響のあった香港、読者・研究者の多い台湾など様々な場所で張愛玲をテーマとするシンポジウムが開かれてきた。彼女の故郷であり、生涯のうち主要な文学活動を行なった上海では、没後一〇年にあたる二〇〇五年こそ、本家本元にあたるこの都市で開催しようと研究者たちが努力奔走し、上層部の批准もこぎつけた。当時、香港の嶺南大学で在外研究中のわたしにも、招待状が届いていた。

が、結局は実現されなかった。噂によれば、ある要人の、「抗日戦争勝利六〇周年の節目のこの大事な年に、親日派（張愛玲の最初の夫胡蘭成など）と関係のあった人物を記念する行事を開催するなどもってのほかだ」という、一通の電話が原因だという。香港では、小さな雑誌にそれを暴露する皮肉混じりの記事が載った。「抗日戦争勝利は一九四五年、張愛玲の没年は一九九五年。彼女が記念される日は永遠にこないだろう！」

後日談はともあれ、わたしは張愛玲という一本の線に導かれて、台湾や香港の文学に入っていった。偶然にもこれも少数民族の時と同じだが、まずは台湾の文学作品集を翻訳出版する話から始まった。分担の話になったとき、もちろんわたしは張愛玲とゆかりのある作家を選んだ。張愛玲に対する思慕を表明して已まない朱天文や平路など女性作家たち、張愛玲がただ一度台湾を訪問した時に彼女の案内をつとめた王禎和、世代的に張愛玲とこれらの作家たちの中間にいて、境遇や作風が張愛玲と似通ったところのある白先勇等々の作家たちだ。こうして「中国文学」という意識の範囲から向かっていった台湾の文学であるが、現在はさまざまな必要に迫られて、戦前の日本統治時代の日本語による文学営為も含め、トータルな形で台湾の文学を見まわす地点に来ている。

実は、この間、中国文学研究から台湾研究へ範囲を広げていったのは、わたしに限ったことではなく、時代のなせる技とも言える。現代中国関係の研究者が台湾の文学を研究するようになったのは、一九八〇年代前半に、香港が一九九七年七月一日にイギリスから中国に返還されることが決まったことも関係していると思う。香港が注目されれば、次には台湾に関心が集まるのは自然の成り行きだ。そして先ほど述べた中国の対外開放政策がある。文学の分野では新中国建設以来の「人民文学」を

最前景とするパースペクティヴの枠組みがゆるみ、奥行きも前景の枠も拡大された。最初は「台澳港文学」と呼ばれておそるおそる取り上げられ始めた台湾・マカオ・香港など大陸以外の中国語文学は、やがて世界に散らばる華僑のはぐくむ文学がイメージされ、「四海文学」という言葉を経て、今日では「華文文学」つまり「中国語文学」という概念に至っている。言葉はともかく、それらは研究者などにとっては最初は「政治的要請」の意味もあったかもしれないが、政治運動をくりかえし、「革命的か非革命的か」の基準で勧善懲悪的に構築された世界に縛られていた読者の目には、非常に新鮮であったろうと思う。

しかし、一方、台湾から考えると、日本による植民地統治などは好んで選んだ歴史体験ではないが、独自の文学史をもっているという自負があり、中国文学の亜流として「華文文学」（中国語文学）の一部という扱いを受けることを潔しとしない部分もある。植民地時代の日本語による創作もふくめた、クレオール的な「台湾文学」の独自のありようが強調されている。わたしの場合、張愛玲研究から入っているので、目下のところは中国語文学ということで　折り合いをつけている部分もあるが、張愛玲研究にしろ、台湾文学にしろ、どこかに正統より異端を選んだという意識があったのかもしれない。それらが「正統」になりつつある（なった?）今、またぞろ異端虫が騒ぎはじめているような気がする。そもそも外国語を専門にしようと考えた大学受験の際、英語ではなく中国語を選んだときから異端への道を歩んでいたのかも知れない。つまりは自分自身が異端なのかも！